

「孟銑伝」について

金子寛哉

浄土宗祖法然上人が中国浄土五祖を述べる中で第四番目に懷感が数えられている。懷感の著述で現存するのは『釈浄土群疑論』七巻のみである。この書に対して序文を書いたのが「屯田員外郎、平昌、孟銑」である。懷感の事蹟が不明なため、それを解明する資料としてこの序文を用いたのであるが、これの資料価値確認の爲には、この序文を書いた「孟銑」とは如何なる人物であつたのかを検討する必要がある。今「孟銑伝」を取りあげたのは以上の如き理由からである。

孟銑の伝記についての研究は最近殆んど見られず、わずかに江戸時代の増上寺の僧「程諾」によつて正徳元年（一七二〇）に出版された『群疑論序解』という書物に記されるもののみである。それによると、『新唐書』卷一九六（三丁、右左）、『万姓統譜』卷一〇八（三丁、左）、『大明一統志』卷三十（卅三丁、右）、『本草綱目』序例第一卷上（五丁、右）、『古今名医図』（未検）、『事物紀原』卷一（五丁、右）等を引用して述べている。

所が『群疑論序解』には、これ等の典拠を挙げて述べた後に、「按德州平昌属河北汝州梁属河南、未詳同人不也。」として、『群疑論序』を書いた「孟銑」と、『新唐書』等に伝記を載せる「孟詵」とは別人ではないかと疑っている。何故ならば、『新唐書』の孟詵伝によると、「賜物百段詔河南春秋給羊酒糜粥」とあり、一方『群疑論序』には先に述べた如く「屯田員外郎、平昌、孟銑」と記されているからである。この中「屯田員外郎」は役職名であり、「平昌」は出身地名であつて『唐書』地理志によれば「德州平原郡平昌」である。德州平原郡とは現在の山東省徳平県であつて河北に属しており、若しも両者が同一人物とすれば、河北に住している孟銑に対してわざわざ河南の人に春秋二回の賜物を賄わせるのは矛盾する。しかも又『新唐書』の孟詵伝の中には「屯田員外郎」の役職名も、「平昌」と言う出身地名も出て来ない。故にこの両者は別人ではないかと言うのである。さて、前述した程諾の『群疑論序解』には示されていない

が、孟詵の伝記を知る手懸りになる物として、更に『旧唐書』卷一九一（列伝第一四一、方伎偏）、『德平縣志』（平昌）、『大荔縣志』（同州、孟詵が刺史に着任）、『台州府志』（孟詵の任地）等が考えられる。尚以上のもとは系列を異にした資料として『太平広記』卷一九七（五丁、左 博物類一）にも孟詵の伝が見られる。

これらの中、最初に『旧唐書』の孟詵伝について見ると、『新唐書』の文より詳しく記されており、後者の文は恐らく前者の文を要略して書かれたものと思われる。この両者の著作年代を見ると、『旧唐書』は後晋（A.D. 936～946）の劉昫等の撰であり、『新唐書』は宋代嘉祐年間（A.D. 1066～68）に歐陽修等が勅を奉じて撰述したものであつて、前者が百年程早くに成立している。又『太平広記』について言えば、宋の太平興国三年（A.D. 978）に李昉等が勅によつて撰したものである。従つて年代的には前二者の中間に位し、記事内容においても前二者に見られないものを述べている。その他の地方志は著作年代も下り、記事内容も多く以上の三者に負うものである。

今『旧唐書』孟詵伝及びその他の資料を参照して見ても、その中には『群疑論序』の著者孟詵の役職名たる「屯田員外郎」は見られない。しかし、出身地名については新・旧両『唐書』等には「汝州梁人」と言うのみであるが、『太平広

記』だけは群疑論序の著者孟詵と同じ「平昌」を出身地と示している。この二つの地名について『德平縣志』には「汝州梁人、寄籍平昌」としている。つまり、もとの本籍は汝州梁であるが後に何かの事情で籍を平昌に移したのではないかと思われる。このことについては牧田諦亮博士が指摘する如く、孟詵の曾孫に孟簡と言う人がおり（旧唐書列伝卷一六三・新唐書一六四）、『大乘本生心地観経』の翻訳にも参与した人で、而も「平昌人」と明記されているので、孟詵が汝州梁からこの地に籍を移していたことは考え得ると述べていられる。

次に前述の程諾の示した「河北の住人に河南の人が賄うのは矛盾する」と言う疑問について見ると、これは程諾が『新唐書』のみを見て『旧唐書』を見なかつた為に起つたものと思われる。何故ならば、『新唐書』に「賜物百段、詔河南_一春秋給_二羊酒糜粥_一」とあるが、『旧唐書』の相当部分には「優詔賜物一百段、又令_三每歲春秋二時_二特給_三羊酒糜粥_一、開元初河南尹畢構」とあつて、「河南に詔して」とはなつていない。しかも孟詵が退官後に住したのが伊陽（汝州梁）の山第とすれば、同一河南であつて問題にはならない。更に程諾のこの疑問の中には「平昌」を本籍地ではなく、「屯田員外郎」在職中の居住地であつて、しかも退官後も平昌に居住していたと言ひ見方をしていたことになる。然らざることは『新唐書』の文面のみより見ても明らかである。即ち、孟詵の居住地

「孟銑伝」について（金子）

は、出身地（汝州梁・平昌）→都（長安・洛陽）→任地（台州・同州）→退官後の住地（伊陽之山第）と移動しているからである。

程諾の今一つの疑問点である「屯田員外郎」の役職名について一言すれば、確かに現存資料による限り現在の所その職名は見られない。しかし、ここでも注意を要するのは、①進士及第、②長樂尉、③鳳閣舍人（AD. 685）、④春官侍郎、⑤睿宗侍読、⑥同州刺史（AD. 701～704）、⑦銀青光祿大夫、⑧退官（AD. 705年頃）と、その役職に変遷のあつたことである。従つてこれ等の変遷の何れかの時期に「屯田員外郎」の職についたのではないかと考えるのは必ずしも不可能ではない。

以上程諾の疑問点を中心に考えて見たのであるが、牧田諦亮博士の指摘及び記事内容から見て、両唐書並びに太平広記に伝を戴せる孟銑の同一人物であることは疑うべくもないが、この三資料に記される孟銑と序文の著者孟銑とが同一人物であるとするには、今の役職名の如き、まだ幾つかの問題点が残されるように思う。ただこで言えることは、両者ともに同一「平昌」の出身者であると言うこと。又『旧唐書』によると孟銑に『家礼』『祭礼』各一卷。『喪服要』二巻、『補養方』『必効方』各三巻、等の著述のあつたことである。これ等の書は何れも現存しないようで、その内容を知ることが出来ないが、書名のみから見ても孟銑が葬祭等に少なから

ぬ関心を示したことは考え得る。

一方『群疑論序』の文中には「以平昌孟銑ニスルヲ早修ニ浄業ヲ」とあり、この「浄業」がこの序文の前後の關係より見て「念仏三昧行」のことと理解し得るとすれば、この点からも両者間には少なからぬ近似性を見得るように思う。

最後に『旧唐書』等のにのせる孟銑の生存年代を見ると、開元の何年に歿したかは不明であるが、今かりに開元初年（AD. 713）に九十三歳で歿したとすれば、武徳四年（AD. 621）の出生となり、一步譲つて開元末年（AD. 741）とすれば貞觀二十三年（AD. 649）出生と言うことになる。この歿年時の決定は在官年代とも関連して更に検討を要するが、右の両者の中間れをとつても懷感の生存年代と殆んど時を同じくしていたことだけは事実である。

序文の著者孟銑と『旧唐書』等の孟銑と同一人物なりと即座に断定するのは控えなければならぬが、少なくとも程諾の持つ問題点だけは以上の検討によつて氷解したように思う。この両者を同一人物なりと断定するのは今後の検討に待つこととする。

1 「銑」と「銑」について『序解』には「一本作孟銑」とあり。もとは「銑」か？

2 『太平広記』は仏教大学大学院修士課程吉野耕史氏の指示による。出典『御史台記』

3 研究発表後京都大学人文科学研究所の牧田諦亮先生より御教示いただいた。